吉備中央

昭和初期の豊野・竹荘地区

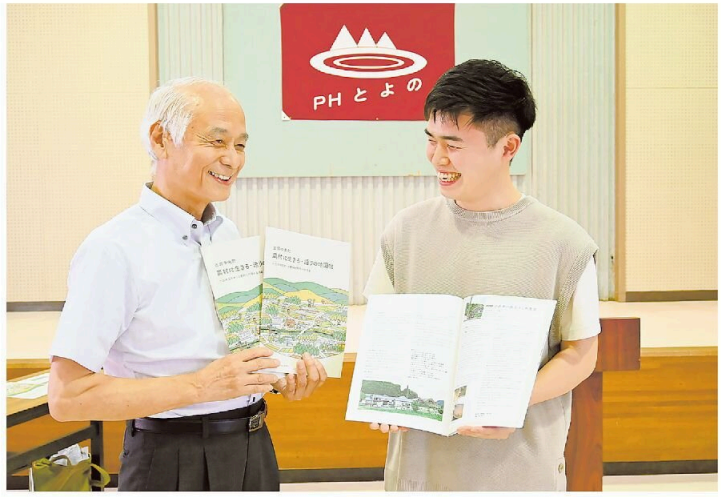
暮らしや歴史を冊子に

県立大生製作「活性化役立てたい」

県立大（総社市窪木）の学生たちが吉備中央町豊野・竹荘地区のお年寄りたちに、昭和初期の農村の様子を聞き取ってまとめた冊子が完成した。庄屋や酒蔵として栄えた豊野地区の小出家を軸に、当時の農村の暮らしや歴史を紹介している。

学生たちは同大建築学科・穂苅耕介准教授の指導を受け、2020年７月から、現在空き家となっている小出家邸宅（同町豊野）の活用を目指すプロジェクトを進めている。庄屋の歴史や住民との関わりについて理解を深めようと、冊子を作った。

冊子のタイトルは「農村に生きる・語りの地図帖」。学生がお年寄り14人に、小出家と太平洋戦争中から戦後にかけての農村の暮らしについてインタビューした。当時あった店や遊び場を記した地図、大相撲巡業（1951年）の写真も盛り込み、活気があった地区の様子を伝えている。



豊野・竹荘地区の昔の生活をまとめた冊子を手にする藤森さん（左）と剣持さん

取材を受けた藤森和典さん（69）＝同町竹荘＝は「自分たちも知らない歴史を調べてくれた。子や孫に伝えたい」と喜ぶ。同大建築学科３年剣持信彦さん（21）は「自分と違う時代の生活や、今後どんな地域にしたいか聞けた。活性化に役立てたい」と話す。

Ａ４判、26ページ。住民に1000部贈呈し、このうち約500部を豊野地区全戸に配布した。同邸宅の活用法や地域活性化を話し合う際に参考にする。（井上恭之）

（Ｃ）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。

2023年6月29日 山陽新聞朝刊 22ページ